

【聞き取り票】

ヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ごう

2013年12月

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんは体と心に深い傷を負い、不安と苦しみを抱えながらも、原爆は人間に何をなし続けるのかを身をもって告発してきました。核戦争の地獄の体験と、被爆者として生きねばならなかった「生」を通じたの命の叫びは、国内外の人びとに原爆被害の実相を知らせ、“核兵器は人間と共存できない”“ふたたび被爆者をつくるな”の声を広げてきました。

平和を求める世界の人々と手をつなぎ、地球上から核兵器をなくすためには、“ノーモア・ヒバクシャ”の志を被爆者とともに共有する人びとの輪をさらに広げていかなければなりません。

日本被団協とノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会は、被爆者とヒロシマ・ナガサキを語り、受け継ぐことを呼びかけます。被爆者と受け継ぎ手が協力して、被爆者一人ひとりの声に耳を傾け、語り合い、記録に残す、被爆の体験の継承を取り組んでいきましょう。

そして取り組んだ成果を世界と未来にむけて、それぞれの地域から発信していきましょう。

[証言者についての基本事項(太線の枠内にご記入ください)]

記入年月日	2014年9月25日	整理 No.	—
ふりがな ご氏名	服部 道子 (はっとり みちこ)	性別	1. 男 <input type="checkbox"/> 2. 女 <input checked="" type="checkbox"/>
生年月日	明・大 <input checked="" type="checkbox"/> 昭 <input type="checkbox"/> 4年 月 日 (被爆時年齢 16歳)		
現住所			
被爆地	1. 広島 <input checked="" type="checkbox"/> 2. 長崎 [町名 距離 . km]		
手帳区分	1. 直爆 <input checked="" type="checkbox"/> 2. 入市 3. 救護 4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種] 6. 被爆者の子・孫 7. その他		
氏名の公表の可否	1. 可 <input checked="" type="checkbox"/> 2. 不可 <input type="checkbox"/>		

1. 被爆したときのことをお聞かせください。

被爆時、年齢が幼くて当時の記憶がない方(被爆二・三世の方)は自分が被爆者(被爆二・三世)であることを、いつ、どのようにして知りましたか。

*2013年7月2日の聞き取り票参照

2. その後の人生についてお聞かせください。

*2013年12月14日の聞き取り票参照

3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

*今回は前半1時間インタビュー形式で聞き取りを行った。この記録ではインタビュー形式をそのまま記載した。

服部道子と申します。埼玉の蕨に住んでおります。私は広島で16歳のときに被爆しました。85歳になりましたが、こうして元気でいます。過去にいろいろありましたけれど、こうしてみなさまとお話しできることを本当に嬉しく思います。

長い人生を生きてきた中で、辛いこと、苦しいこと、数々ありました。楽しいことよりね。でもね、最近になって生きていたからこそ楽しい生活が出来て、みなさまとこうしてお話が出来るということを嬉しく思っています。私は30年、40年前から原爆は悪だということ、あの日死んでしまった人を思えば幸せだと思って、恥も外聞もなく自分の本当の話を語って歩いてきました。本も書いております。

これまで日本国内はあちこち行って、私の被爆体験をお話してきました。去年の秋にピースボートからお話がありまして、乗ってくれないかというんですね。ピースボートに乗るにはいろいろ条件があるし、レポートも書かなくてはならない。私もこの歳だからと言ったんです。お友だちにも「あなたね、10日や20日じゃないのよ。3ヵ月も行くのよ」って言われました。ですけれど、今、行っておかないとっと思ったし、そう言われて私はなおさら燃えてしまったんです。川崎さんと面接したんですが、「ぜひ行ってください」ということになって船に乗ることになりました。広島から6人、長崎から1人の8人の被爆者が船に乗ることになりましたが私がいちばん歳が上なんです。

今日はいろいろ資料を持ってきた中に委託状というのがあります。被爆者8人は外務省の委託なんです。あとユースの若者2人が。一人は演劇をやる方で浜田あゆみさん。もう一人は広島大学の学生の福岡奈織さん。

被爆者が乗るのは今回で7回目なんです。いちばん最初は被爆者が100人も招待で乗っ

て、それで燃えて一生懸命運動するようになった人もいます。

私は今年2月に初めてパスポートを取ったんです。パスポートを取りに行ったら係の人に「ええ、初めてですか？」って言われちゃったの。「なんで？おかしいですか」って言ったら「そんなことはないんですよ。いいんですよ」って。こんなお婆さんがね、世界一周でしょう。みんなにびっくりされて。でも、行くからには元気で帰ってこなきゃあと思って乗ったんです。

船の中ではみんなあだ名をつけるんです。渡辺さんなら「なべちゃん」とか。私は「はっちゃん」と呼ばれていました。私は若いものに被爆のことを聞いてもらおうと思って、若い者、若い者、私ひとりが飛んで跳ねて若いものに接触したんです。だから若い者がすごく慕ってくれてね。はっちゃん、はっちゃんと言ってくれるんです。でも若者は被爆の話は意外と知らないんですよ。

司会：ピースボートに乗っている若者がですか？

「えっ、アメリカと戦争してたの」「こんなにアメリカと仲がいいのに」「たった70年くらい前なの」という子がいるんですよ。それに私は驚いたんです。それでね、「8月6日、9日、15日は何の日か知っている？」って聞いても、「何の日だっけ」っていう人がたくさんいるのね。それで、やっぱり知らない人が多いんだな。これじゃいけないなって思った。

ピースボートは参加者が平和を求めて乗っているから、そういう学習があるわけね。いろいろな勉強会があって、いろいろな先生が乗っていて色々なことを教えます。英語からフランス語から、社会勉強も食べ物からなにから色々なものがあります。ピースボートというのは、そうやって平和について学習する船なんです。その中で私はシリーズとして「はっちゃんの本当の話」と何回も何回もやってきました。

司会：船内では記憶の継承とか核に関する勉強会などを行って、寄港した国で核兵器廃絶の訴える、そういった活動をするプログラムですか。

そうです。

司会：立ち寄った国の中でシンガポールが服部さんの中では印象深い国の一つでしたね。どんなことが印象的でしたか。

その前にブルネイのムアラに寄港したんです。ブルネイの元首相は広島にいたことがあるの。その人は92歳になるけど、せっかく来たんだからちょっと会ってみたらということで、証言ではないけれど会いに行ったんですよ。そうしたらね、大変立派なお屋敷に案内されて。そこでは元首相がとても優しく迎え入れてくださったのね。その人は戦争中に広大に行っていたんですって。戦争中にね、あちこちの優秀な学生を東大とか広大とかに集めて日本で教

育をして、日本が勝ったら各地に送って日本の政策を実行させるという意気込みだったのね。だけど結局は負けちゃったでしょう。それでね、あの当時ですよ、富士山に登ったんですって。「桜を知っていますか」と聞いても忘れていたけど、それだけは覚えているの。外務省の役人が連れて行ったって。当時それだけ優遇したということよね。

お屋敷には元首相が大学の角帽をかぶった写真もあるし、日本の人形も置いてある。その時に「日本をどう思いますか」とたずねたら、「僕も日本で原爆にあった」って言うの。

司会：日本に留学中にですか。

そう。でもちょっと離れていたから直接は被爆しなかったって。その後すぐに護衛付きでブルネイに帰されたんですって。その中で印象に残ったことを申し上げますと、こうおっしゃったんです。「僕は被爆したけれど、もし補償をもらうんだったら日本からはもらわない。アメリカからもらいたい」って。その言葉が私は印象に残った。



シンガポール

第7回

「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

それで私が最初に被爆の証言をする国がシンガポールだったんです。シンガポールでは昭南島といって、南方でいちばん最初に侵略してとった島です。占領して直ぐにつけた名前が「昭南島」。シンガポールでは日本は加害者でもあるんですよ。私はね、他の国には原爆の被害者の立場で行くんですけど、シンガポールでは加害者と被害者の立場で話をすることで非常に考えたんですよ。私はまずいちばん最初に謝るべきだと思ひましてね、壇上にいたとき謝りました。シンガポールでの証言はうまくいきました。川崎さんにもよくやっただと言われてね、ホッとしました。シンガポールでは取材も受けて新聞に載ったんですけど私は横文字だから読めないから。読んで聞かせてもらいたいと思って今日も持ってきたんですけど。いちばん最初ということでユースの人もはりきっちゃいましてね、演劇をしている方が。私の16歳のお話を英語で、その当時の16歳の格好をして。私もそういう格好をして

証言をしました。

船では毎朝8時になると甲板の下で落語を聞く会の若者たち、年寄りのグループがあるんですが、色々な人の落語を聞いてアッハッハと笑うんです。シンガポールでどんなお話をしようかということを考えながら甲板で朝食を食べていると下の方でアハハ、アハハと笑っているんですよ。私はね、楽しそうで今の若者はいいなと思うと同時に、シンガポールのわきにスマトラという島があるんですが、その沖で私の父親の乗った船が魚雷にあたって沈没しているんです。

私の父は無線局長、今は無線局長というのはいないんですよ。今は衛星で、船には無線局長なんていらないと船長さんがおっしゃっていました。でも昔は船長、機関長、無線局長と三役いなくてはならない人材だったんです。魚雷にやられたのが兵隊を降ろしての帰りだったから被害が少なかったとはいえ、魚雷にやられて沈没していく。その時に無線局長ですからSOS、どこで何時何分どうやって沈んでいくということを日本に知らせなくてはならない。それを通信する間、もうダメだ、水がお腹まで来ている。これで最後ですと通信を送ったあと、飛び込んだんです。父は泳げないんです。金づちで、一度沈んで浮いた時に何かにつかまらなくては木をつかんだり人をつかんだりしたの。そうしてある人をつかんだらね、「つかんだらダメだよ。俺もやっとなんと泳いでいるんだから」って言われた。「頼む、服部だ」と言ったら「局長じゃあしょうがない」と言ってつかまらせてくれたんだって。父はそれで生きて帰って軍に勤めたんですけど、結局は原爆で死にました。

笑い声を聞きながら、今は静かな海だけど、この海の下には船もろとも沈没したたくさんの人たちがいるんだ。この若者たちはそういうことを知っているうえで笑っているのかな、楽しんでいるのかなって思いました。

それと朝日、夕日を見ますと、私はきれいだなと思いますけれど、あの地平線に真っ赤に染まるあの色を見たときに原爆を思い出します。あの下で「助けて」「お水ちょうだい」「痛いよ、苦しいよ、お願い」という声がね、背中を押すんですよ。ですからね、太陽を見ながら私はいつも手を合わせて、ありがとう、そして安らかに眠って下さいって。日本は平和ですけど、ふたたび戦争はさせないようにおばあちゃん頑張るからねって言って、私はね、いつも祈っていました。

みんなもね、自分に置き換えて私の話を聞いてもらいたいの。「そうだったのか」「そんなことがあったのか」ではなくてね。私がどんな思いで話をしているのか。あの日のことがね、目から離れないの。寒気がするの、今でも。火傷をしてお腹から内臓が出たり、腕が千切れたり、首がとんだ人をこの目で見て、この手で触って治療してきたんよ。たった16歳よ。16歳でもそれをせざる得ないのよ、人がいないんだから。学校で私はたまたま1年間特訓したからそれができた。

挺身隊なんかで鉄砲の弾を磨いたり、ボタン付けしたり。ボタン付けをするんだって針が通らないくらい渋いんよ。なぜかといったら、もう日本に軍服なんかないから、戦地から剥いてきたものを、鉄砲の弾が当たったものを繕わされるのよ。女学校の生徒がね。それで一生懸命やればやるほど針が折れてしまう。わかるでしょう。そうすると下士官が立っていて

下手くそだってひっぱたかれるの。そうじゃないのよ。真剣にやればやるほど針が折れてしまう。針一本だって大切なのよ。そういう軍事教育を私たちは受けてきてるの。針だって配給制なのよ。針一本だって大切な。それで戦争は勝てるかしらと子どもながらにも思っていた。でも、そんなことを口に出したら非国民って引っ張られちゃうし、殴られちゃうから言えない。軍国主義ということはそういうことなのよ。軍国主義という言葉覚えてちょうだい。そして調べてください。軍国主義とはどんなことだったのか。

戻りますけれど、この海の中にはたくさんの戦死者がいるんだ。でもこの子たちはね、そういうことを知っていてくれるのかなと思いました。だから若者たちに、知っていて楽しいということはいいけれど、知らないということは、なんていうかね、外国の人と話をするにも知って話をするのと、知らないで話をするのと違うと思うのね。だから日本の過去をある程度知っていてもらいたい。そう思いました。

司会：シンガポールの人たちは服部さんのお話をどんな様子で聞いていましたか。

真剣に、そうだったのかと聞いていました。日本人も知らないくらいだから外国の人は知らんのよ。ヨルダンに行ったときに議会に行ったの。議会の偉い人がずらっと並んでいる。そこでも私は本当の話をしたの。そうしたらある人が、本だとか写真だとかでヒロシマ、ナガサキ、それから原発。そういうことは聞いている。だけどそんなに酷かったのかって。私が強調したのはたった一発の原爆で何万人もの人が死ぬんだよ。どれだけの力で、どれだけの圧力で、こんな格好になってしまうんだよ、ということをお話しました。

司会：ヨルダンの国会議員の方たちに。

そう。みんなため息をついて、そして「どうしてあんたは今まで生きてるのか」と、こう言うから、「おかしく感じるでしょうけれど、その時は傷はなかったし何でもなくても、あとで下痢をしたり、吐いているものに血が混じったりしました。おできがいっぱいできたり。それを克服し克服しこやって生きています。平成8年に肺がんで肺も切っているのよ」。

話が飛びますけれど、手術したのが内視鏡をアメリカで勉強してきたばかりの若い先生なの。それで、服部さん、あんた体力ありそうだからやらせてくれないかって言うの。もう一人同じような病状の人がいたのね。その人はやらなかった。私は先生がぜひやりたいという、それだけの意気込みがあるんだっいたら、私は一度は原爆で死んだと同然なんだから先生に身体を預けます。同意書があるというから、ええ、もちろん書きますよって。家族もみんな呼んで書かせて。そして、もし失敗して内視鏡で取れなかったら、背中を両方切って14針縫うんで傷ができるよって言うから、大丈夫ですよって。それで手術したんです。8階の部屋で東京タワーが見えてね、いい病室でしたよ。9か月くらい過ごしましたがけれど、それでも今もこうして生きています。手術を断ったもう一人の人はどうしたかというと死んじゃいましたよ。人間って奇蹟とか運であるんですよ。だから人間は最後の最後まであきらめ

てはいけない。

命があってこそそのことだって、いちばん言いたい。戦争は国と国とがやるけれど、やっぱり命のことを考えてもらいたい。戦争になったときに自分はどうなるかって。上に立つ人は人にやらせればいいって指図するだけでしょ。

それから、もう一つ言いたいのは、どこだっけな……

司会：ベネズエラ。



ベネズエラ

第7回

「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

南米のベネズエラは国をあげてピースボートを歓迎してくれるの。ピースボートは長年、あっちの国、こっちの国へ行って、それだけのことをしてきているのよ。難民の人たちに寄付をあげたり、あるところではミシンを何台か差し上げて。それで生計を立てられるようにしたり。おむつを持って行ったり包帯を持って行ったりして差し入れて、そういうことをしているのね。だからどこの国へ行っても気持ちよく受け入れてくれるの。気持ちよく受け入れてくれるから私たちも気持ちよく入れるでしょう。そしてよく来たねって言うってくれる。

ベネズエラでは最初に船の中で記者会見があったのね。その記者会見に代表で私に出ろって言うわけ。私が代表で通訳を入れて被爆のお話をしました。そこには州長さんとかね、副大臣さんとか、市長会長さんとかが大勢来てね、みんなで食事をしたり大騒ぎをしたの。その時に、今晚は大勢の市民を集めてフェスティバルをやるからぜひ来てくださいと招待されたの。そこで歌ったり踊ったりしましょうって。そんなことをするのは大変だな、私はしたことないのになって思ったけれど。向こうの人はお箸を持ってないのに、フォークありますよっていうのを、一生懸命日本式に食べようとお食事をしているわけ。一生懸命取れないのを取って和やかにして。

午後から他の人たちが学校に行っただです。学校に行ったら300人くらい生徒たちがいらして、そこで証言したんです。そうすると暑いから、だんだん聞いている人が減っていく

のね。「難しいや」って言って。だんだん減っていくのでさびしいなと思ったけれど、100人くらいが残って、その人たちは真剣になって聞いてくれたって。私たちはベネズエラの裏側の日本から来ました。日本という国を知っていますか、というお話からしてね。本当に楽しかった。子どもたちが一生懸命聞いてくださったのです。

そして夜です。三瀬清一朗さんが被爆のお話をしたあとフェスティバルですよ。平和のオーケストラ「エル・システマ」、貧富の格差が大きいベネズエラで、貧困層の子どもたちが演奏を学べるようにと始まった無料の音楽教室で、世界的な注目を集めるとともに、国内では約30万人のメンバーが参加するオーケストラへと成長しています。そういう団体が来てバンドをして、そこで踊ったの。どうぞ踊ってくださいと手を出されてさ。私も躊躇したけどさ、ドレス着ておしゃれしていったからさ、この時ばかりは日本の女もさ、こんなおばあちゃんでもさ、腰の一つもふれないじゃ恥ずかしいと思ったから、もういいやと思ったから。恥はかき捨てという話があるけれどさ、手を出されたから一緒になってダンスを踊りました。私も少しダンスやるからね、ついて踊って騒いできました。こっちも日本の炭坑節を踊ったり、いろんなことをやったりした。ベネズエラの市民たちが700人からいるところで大騒ぎして、とっても素晴らしいフェスティバルだったのよ。

南米は1968年にトラテロルコ条約といって、中南米地域の核兵器の実験・使用・製造・生産・取得・貯蔵・配備等を禁止する条約「ラテンアメリカにおける核兵器の禁止に関する条約」をつくったんだよね。中南米を非核地帯にしようという運動があって。その先頭に立っているマドゥロ大統領に会ったのよ。なかなか大統領に時間がなくて会えない。その前にあっちこっち、シモン・ボリバルさんのお墓にまわったり音楽を聴いたりしながら時間を費やしてた。そうしたら音楽が終ったとたんに、あるところに行ったら会えるということになっていったのよ。

司会：大統領と。



ベネズエラ

第7回

「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

大統領と会ったの。会えるのは被爆者だけ、他の人はダメって。被爆者だけで会ってね。大きな男なのよ、見上げるようでしたよ。手も大きいし。私ね、鶴を持って行ってかけてあげて、平和のためにお願いしますって言って握手したんだけど、びっくりするほど大きな男でした。

司会：会話とかされましたか。

したんだけど何を言っているか私にはわからないの。私は南米でリーダーシップを発揮してください。私たちも頑張りますからと伝えてくださいと言ったに過ぎないの。大統領も何か言ったけれど私には通訳が遠くにいて聞き取れない。どこで会ったかというとな、ネズエラの国民にマンションを3つ建てたんだ。ベネゼエラは赤と黄色と青・・・・・・・・

□：国旗の色ですか。

国旗の色ね。その色に染めて建てた。そのうちの一つに行ってカギを渡すという式の会場に行ったわけよ。会えて良かったと思います。その写真が放映されたという話を聞きました。

あと、こういう質問には困るのね。あなた達も核の被害を受けたらうけれど、今、原発を売りに来ているというんだよね。

司会：日本が？

日本が。俺たちはいらなくて。だって石油がいっぱい取れるんだもん。原発なんかいらねえよね。石油で潤っている国だから。お前たちは、なぜ、あんなにひどい放射能の痛手を受けているのに原発をすすめるのかって。ヨルダンでも、他の国でも聞かれました。私は外務省の人間でもないし大臣でもないから、被爆者個人としてはこういう考えていますと言ったの。「個人の考えですよ」って、通訳に念を押してもらって、日本はご存じのように資源がない国で、どうしようもないから原発を奨励してきたけれど、3.11事故で痛手を受けている。今現在は使っていません。これから使おうとしているけれど、今のところは使わなくても間にあっている。いずれは別のものに切り替えるという方針は変わりありません。あなたの国に原発を買ってほしいと言ったことについては被爆者のひとりとして恥ずかしいって。私はそう申しあげました。

アメリカと日本は戦争をしたけれど、アメリカをどう思いますかということも聞かれました。この質問にも私は困りました。私は今はアメリカを憎んでいませんと言ったの。力をあわせて一緒に平和に向かうように努力していますけれど、核兵器を持っていることについては心外ですって。核兵器だけは持ってもらいたくないです。戦争だけはしたくないですって、どこの国でも唱えてきました。ひとりのおばあちゃんではあるけれど、これはみんなを代表

して言っているんですよ。特に被爆者はああいう痛手を受けて放射能の怖さを知っているんだから、処理の仕方もわからないものを日本も含めて全世界が使うべきではないということ はよく言ってきました。

司会：あまり残りの時間がありませんが、いろいろな国に行かれて、記憶継承ということをやってきて感じたこと、若者たちが服部さんのお話を聞いてどういうリアクションをしていたか、そういったことをお話ください。

最初はね、私はおりづるプロジェクトというのは、ただ折り鶴を折ればいいんだと思ってた。集まった人が折り鶴を一生懸命折って、それはたくさん持ってきましたよ。それはひとりひとりの心です。折り鶴を、行った先の子どもたちや、学校、大臣の首にかけてあげましたよ。そういう活動もしましたけれど、実はおりづるプロジェクトはそういうものではないんです。

ピースボートでは、NPO 法人コモンビートと共同で、「洋上ミュージカル」を行っています。実際に感じた異文化体験を活かしながらミュージカル「A COMMON BEAT」を作り上げます。争っていた赤青黄緑の四つの国が仲良く平和になるというミュージカルですが、若い者がバラバラでまとまりがつかなし、人が集まらない。はっちゃん、悪いけれどちょっと戦争の話をしてくれないかっていわれてね。私が戦争の話をしだしたらね、2時間ぐらいかかっちゃうからね。20分では話せないからあなたがインタビューしてよって頼んだの。質問に答える形で私がああ時のことを話をしたら若者が、最初はぼやーっとしていたのが目の色を変えてね、真剣に聞いてくれたの。嬉しかった。その明るく日から80人、100人が一丸となって学習して、練習して、それですごいミュージカルをしてくれました。

それとから孫プロジェクトというのをつくったんです。8人被爆者それぞれに、このひとに3人、この人に5人とか、興味のある学生、一般の人が集まって孫になったんです。それでそれぞれのグループでお話をしたのね。その人の一生を。私のところには女の子が8人来ましたよ。その8人がね、みんなすごくそろってるんだよね。背が高くてきれいな子が8人もそろっちゃった。それで2日間にわたって私のお話をしてあげたの。そうしたらわかって。ファッションショーをするって、私のグループは。



孫プロジェクトの参加者

第7回

「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

司会：服部さんのお話を聞いて、それをファッションショーで表現した。

そう。ファッションショーで表現するって若者が行ってね。他の人のグループはどうだったのか聞いたら、絵を描いたグループもあった。世界地図を描いて、そこに思いを書き込んで貼るとか。歌をつくったグループもあった。いい歌が出来たんですよ。それはお母さんの歌なんだけれど、その人は幼い時に被爆して、お母さんが苦勞なさって。そのお母さんが去年亡くなったって。それを淋しくない、いい歌にしたんですよ。あれは何の花だっけ。そう、カンナの花です。カンナの真っ赤な花を見ると、お母さんは赤い血を思い出すんでしょうね。カンナが嫌いだったんだけど、ボケてきたらカンナの花をいとおしく思うようになって、カンナを飾るようになったっていう、そのお話を歌にしたんです。



カンナの花収録の様子

第7回

「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

ファッションショーはみんなが服を破ってさ。メイキャップやる人がいたんだって、8人の中に。中国人もいて、その人はね、中国でファッションモデルやっている。看護師やフリーライターをやっている人もいて、色々な人たちがいて。私はモンペをはいてボロボロの日本の昔の着物を着るのかと思ったらそんなものじゃない。今どきのすごいドレスで始まってね。過去、現在、未来と、やってくれたのよ。これ素晴らしかったよ。舞台上で30分やったんだけど。演出も音楽も良くて、私泣いちゃった。すばらしい。最初は若者には言ってもわからないかなと思ったけれど、そんなことはない。若者によく話して言って聞かせれば、本当に燃えて一生懸命やってくれる。捨てたものではない。今の若者はっていう人がいるけれど、そうじゃないと思います。やる気があればね、演劇だろうが歌だろうが詩だろうが、なんでも表現できると思った。



ファッションショー
(被爆後)

第7回
「ヒバクシャ地球一周
証言の航海」
(写真提供：ピースボート)



ファッションショー
(未来)

第7回
「ヒバクシャ地球一周
証言の航海」
(写真提供：ピースボート)

司会：話を聞くだけではなくて、そうやって表現することも大事かもしれないですね。

船を乗るときにね、こういうシナリオがあるんだけど、これをどうにか一つにまとめてくれないかって。船を降りる寸前まででいいから、3ヵ月の間に温めて、最後の発表会にバツと出してくれないかと頼んだ子がいたの。途中でアウシュビッツも一緒に行ったし、その時も一生懸命写真を撮ったりいろいろしていたやっていたよ。やってくれているなと思ったよ。でも、あとは男の子と遊んだりしているからダメなのかなって思って。それで私が頼んだの、ダメならダメでやめちゃいな。負担になっちゃって、これから他の勉強もあるんだろ

うし、私のことばかり関わってられないだろうからって言ったの。そうしたら、やらせてくださいって。「はっちゃん、あとで見てください。これは内緒ですから」って言ってくれたの。最後は100人からの人が、ひとりひとり一言一言読んでくれたの。読んでくれるということは一行でも二行でも、戦争、被爆に対して意識があるから読むんでしょ。ぜんぜん関心がなければ読まないよね。だからね、よかったなー、100人の子どもが平和に対して関心を持ってくれたと思って、私は嬉しいと思いました。

若者もね、やってくれるのよ。だからみなさんもやってよね。

司会：ありがとうございました。記憶継承や若者との交流の話は参考になったと思います。長時間話して頂いたのでここで5分休憩を取ろうと思います。5分の間に服部さんの証言を書いた聞き取り票がありますので、こちらの方に目を通して頂ければともいます。

7月、8月だけじゃなくて、続けることに意義があるの。だから一回だけではなく、次の人に、一人から二人、二人から三人とつなげるようにしてもらいたいの。お願いします。



聞き取った被爆の証言を自分の言葉で

第7回

「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？

1. 可 2. 不可

【聞き取りをおこなった方の記入欄】

聞き取り日時	2014年8月24日(土)13:30~16:00	場所	主婦会館プラザエフ 5F
聞き取りをされたのは	グループ〔名称:ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク「被爆の証言を聞くつどい」受け継ぎ手6名〕		
聞き取り票記入者	島村雅人	TEL/メール	03-5216-7757
連絡先住所等	〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会		

4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

*後半1時間半、服部さんお話を受けてディスカッションを行った。以下、ディスカッションの概要です。

□：服部さんは比治山高女なんですか。私は広島女学院です。

服部：私は比治山高女の3期生。当時の女学校は5年生だったけれど私たちは4年で卒業よ。戦争がいちばん激しくて。だから勉強なんか全然していないの。英語も勉強していないから、今、困っているの。外国に行った時にもう少し英語を勉強しておけばよかったなって。

司会：通訳の方が勘違いをしましてこともあったんですね。

服部：ビキニ事件があったじゃない。通訳の人がビキニと言ったら水着のビキニだと思っただけなのね。服部さん、何を言い出したのか、気が違っちゃったんじゃないかと思っただけなの。一瞬、どう説明していいかわからなかったって。だから通訳をする人もある程度のことには知っていないとね。ビキニ環礁で第5福竜丸の話があるんよって。第五福竜丸を知っていればいいけれど知らないでしょう、その通訳の人は。

司会：この朗読はピースボートで演劇の方が朗読したものでですか。

服部：これを英語で朗読したの。

司会：英語で朗読したものの日本語バージョンですね。

服部：そう。何人かで読んでもらったら感じがわかるんじゃないかな。

司会：最後に時間をとってみんなで読みたいと思います。ここからはせっかく集まっていますので、質問ですとか、服部さんのお話を聞いて感じたことをシェアして、またそれを受けて服部さんのお話を聞く時間にしたいと思います。

まず私から。私は一昨日も服部さんにお会いしてじっくりお話を聞いたんですけど、やっぱり、これからの時代、記憶継承ということを考えていかななくてはならないと思っています。ただ現実問題として記憶継承ということがあまり広がっていないし、日本でもヒロシマ・ナガサキについても知らない方がたくさんいます。まして外国人となるとなかなか理解してもらえないんじゃないかと長年思っていたんですけど、今日の服部さんの海外で経験を聞いていると、海外の方であっても話せばわかってくれる。日本が加害国として関わってしまったシンガポールであっても、服部さんが最初に謝ったとおっしゃっていましたが、そういった誠意を見せればちゃんと話を聞いてくれる。日本に全くなじみのないヨルダンといった地域でも話しを聞いてくださった。世界に継承活動を広げていくことは、これからどんどん進めていけば達成できるという明るい印象を持つことができました。

いくつも質問したいことがあったけれど、どれにしようかな。若い方ですとか、外国人に語る上で、ここはたいへんだったとか、ここは苦勞したとか、これからの課題だなと思っていることは何かありますか。



ベネズエラ

第7回

「ヒバクシャ地球一周

証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

服部：外国人でもね、どこの国の人でも、やっぱりこちらが親身になって接すれば向こうから近づいてくれる。私ね、ジブラルタルの時かな、こうやって話をした時にハグっていうの。向こうから抱き合ってくれるの。その時に私の話が伝わったんだなと感じた。

言葉が通じなくても、クナ族のところへ行った時に、車で何時間もかかる貧困なところだけど、私と同じ年のおばあちゃんが同じだというのよね。ハグして握手して。しばらくしてそのおばあちゃんがまた来たのよ。家からタオル、刺繍したものを持って。パッチワークみたいなことをしている国なんだね。それを私にプレゼントしてくれた。とっさのことで私は何も持っていないでしょう。それで、何も上げるものがない。しょうがないから首飾りをプレゼントしちゃったの。あなたは原爆、その人は強姦されて6人子どもがいるんだって。6人ともみんな違うんだって。黒んぼもいれば白んぼもいる。きれいな子もいれば不具の子もいる。これも戦争犠牲者だよ。好きでやったわけじゃない。生きるがためにやった。でも、今は私は幸せなんだよって言うの。こうやって息子、立派な息子がいましたよ。この息子に養ってもらってるんだって。私は強く握手しました。戦争だからそういうことが起きてしまったのね。生きるためにはしょうがない。慰安婦とか、いろいろな問題があるじゃないですか。

やっぱり考えるのは、ひとりひとりの意見で戦争を食い止めなくてはならない。いくら国が潤うから軍需産業をつくらうとか、今、日本でも外国でも軍のお金って相当なのよ。そのお金があったら難民や困っている人を救えると思うの。外国は上下の差がすごい。街に行けば議会なんかは立派だけど一歩出れば貧民窟っていうの、私たちが原爆にあって、その年にぐらいに住んだようなあばら家みたいな家がいっぱいあるし。すごいですよ、ごみは落ちてる、紙はない。どこも紙がないとおトイレ出来ないんだからね。水もない。

ペルーの奥の方の日系人のところにも4時間も車に乗って訪ねて行ったけれど砂埃がすごくて。雨が一年中降らないんだって。でも、そういうところにも家があって住んでいるんだよ。そんな環境だから大概40～50歳で死んでしまう。長生きできない。砂漠で水もないところでね。だから初めて外国を見てきてね、日本はきれいだし、秩序、道徳、それがいいって。ある国は自由はいいんだけど、何でも盗り合いですよ、子どもたちが。

□：今日は本当に貴重なお話をありがとうございました。服部さんのお話の中で、水平線に沈む夕日を見たときに、辺りが真っ赤になったその光景を見たときに、原爆の日のことを思い出すとおっしゃっていたことが、すごく印象に残りました。思い出すだけでも身体に寒気がするだとか、辛い思いでもたくさんあったと思うんですけど、そういったことを事実として、次の世代に、若者に語り継いでいくっていうことをされていることについて感銘を受けました。服部さんの思いを受けて、自分は次の世代を担う者として、その責任としてこれから出来る限り平和を広める活動に参加していきたいと思います。

毎年8月に平和の祈りコンサートというのを新潟県に帰省して、私、ハンガリーの楽器をやっているんですけども、それを演奏しています。これからもそれは続けていきたいですし、今後また新しい活動などできることがありましたら、ぜひそういったものにも参

加していきたいと思います。（服部：ありがとう。頼もしい。）

高校時代にチェコに留学していたことがありまして、現地の学校に通っていたんですけど、世界史の授業でヒロシマ・ナガサキのことが出たんです。（ほんとに）ヒロシマ・ナガサキ・原爆というワードで。その時はまだチェコ語が拙いものでしたのになかなか理解できなかってんですけども、先生が原爆が落とされたのはどこの国ですかということを知って、日本ということももちろんですが、ヒロシマ・ナガサキというカタコトが出てきまして大変びっくりしました。日本の若者が知らないことを外国の方が知っていて、重大なことだと受けとめているという事実を突きつけられて、自分はハッとして、日本の人が知らないのは恥だなということを感じました。たくさん学ばせていただきました。ありがとうございました。

服部：勉強している人は知っているよ。でも知らない人がほとんどだから。ありがとう。

□：服部さん、今日はありがとうございました。私は2歳で長崎で被爆したものですから、被爆者の中では年齢的に若いかわりに何も記憶がない。諸先輩の方々が伝えてこられたことを次の世代に伝えるために何ができるかを考えて、今日、被爆者の声を受け継ぐ映画祭をやっております。「生きてはじめて若い人に伝えられる」という、ここに至るまでは70年間、いろいろなご経験をなさって来たと思います。お父さんがお亡くなりになるところが聞き取り票にあって、お父様の遺言ですかね、お父様のお気持ちとして妹さん弟さん、お母様の3人の面倒を託された。いろいろなご苦労があったでしょうが、今日まで生き続けてこられて、世界にお話していただけるということに感銘を受けて聞かせていただきました。ファッションショーだとか、伝える仕方を若い人がそれなりに工夫をしながらやっつけらっしゃる。若い人も聞けばやって下さる。亡くなっていった人たちのために話すんだということをして、続けていらっしゃる服部さんをはじめとして被爆者の先輩たちが、そうやってやって下さるということをして大事にして心して聞かなくてはいけないと思っています。

服部：命があればもう一回行きたいと思います。今度行ったらもっと言いたいことを言える。まだいっぱい夢があります。若いあなたたちはまだまだ先があるんだから、これからそういう機会をつくっていただきたいと思います。

司会：服部さんの被爆当時の体験は聞き取り記録に詳しく書いてありますのでぜひお読みください。

□：ありがとうございました。生きてるからこそ、今、こうやってお話が出来ていとおっしゃられているんですけど、私も被爆3世で、私のおじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃん、おばあちゃんも被爆していて。おじいちゃんは2歳か3歳の時に被爆しているんですけど、みんなまだ生きています。おじいちゃんが生きていたからこそ、今、私も

ここにいるんだなと感じていて。その使命感から東京でヒロシマ・ナガサキについて伝える活動をしています。

でも、東京に来て感じるのは、やっぱり広島に住んでいたから、けっこう身近に原爆のことを知る機会や平和学習の機会があっただけで、東京に来ると8月6日が何の日かわからない若い人たちも多い。なんでみんな知らないんだろうと責める気持ちもあったんですけど、それはたまたま近くに知る機会がなかっただけで、興味があるとか、知りたいんだと言ってくれる若者が思っていたよりも多いこともわかりました。

日本人の学生って、そういうことを考えるのは難しいこと、堅い話や難しい話だと、例えば自分がまったく知らないからそんな状態で話を聞いていいのかな、みたいに考えてしまう子が多くて。私もアメリカに行っていたんですけど、アメリカ人は広島出身と知ると自分の方から話しかけてくれたりとか、そういう姿勢を日本の学生も持ってほしいなと思っています。それこそ、そういうハードルをいい意味で下げるために歌とか劇とかファッションショーとか、それなら自分たちもできるかなって思ってくれる若者も多いと思いました。私の団体でもできればいいなと思っています。

伝え続けることの難しさ、私の世代がギリギリ被爆者の人の話を生で聞ける世代だと思うので、引く継ぐ世代としてもっと聞かなくてはいけし、聞くだけではなく次の世代に伝えることもしなくては思いました。

服部さんも最初は思い出すことだけで辛くて、話すことができない時期があったかもしれないけれど、それでも話し続けられていて、単純にすごいなーと感じました。今でも話せないという人もいないですか。服部さんが話そうと思ったきっかけはどんなことですか。

服部：みなさんに聞きだし上手になってもらいたいと思うの。本人は自分からああだったこうだったと言いたくない。聞かれりゃしょうがないから言う。お父さん、昔はどんなご飯を食べていたの、からでもいい。何かを聞き出して、それをつなげていく。聞きだし上手になってもらいたいと思うの。戦争に行つて人を殺してきたかも知れないのよ。そんなこと家族に言えますか？言わないで死んだ人はいっぱいいる。でも事実はね、戦争はやられるかやるかなの。やられるときはやらなくてはしょうがないでしょう。自分の意じゃなくてもやらなくてはならないのが戦争。殺し合い。そこを考えてもらいたい。だから命とはどういうものなのかを根本的に考えてもらいたい。私はそう思う。

□：服部さんのご証言は過去の2回分を聞き取り票でじっくり読ませていただいていたので、ようやくお会いできたと嬉しいです。外国の方にもわかってもらえるというお話がありましたが、継承する会の事務局長の伊藤さんも世界法廷運動で国際司法裁判所に行った時に、広島、長崎の市長さんが証言した時に法廷の雰囲気が変わったと言うんです。裁判官の人達も知らないから衝撃を受けていたって。だから本や写真では知っているけれど、本当にそんなにひどいことがあったのかということ証言を聞くことでリアルに心に届くような形で伝わった。国際司法裁判所で勧告的意見が出されたのは、ほんとうに被爆者の方の証言だとい

うのを肌で感じたんですって。それが事務局長として一生懸命頑張る力になっているというお話をお聞きしました。それが今日の服部さんのピースボートでのお話と重なって。外国の人もそうですけれど、若い人もそうなんじゃないかと思ったんですよ。今の若い人たちは知らない状態なんだから、それを私たちが知らせる運動する。

私もシンガポールに行ったり、マリアナ連邦のロタ島に行ったりしたんだけど、向こうのお年寄り日本語をしゃべれるんですよ、本当に。錆びた高射砲なのかな、置いてあるんですよ。こんなところにまで日本軍の跡があるって。そんなことまで考えずに行っちゃったけども、そういうことも含めて日本が外国に戦争でした、そのことによって日本中が空襲にあって大変なことになっちゃったし、その極限が広島と長崎だって。加害者と被害者のお話もそうだと思うって。

それを堅い話や難しい話にしないで表現したファッションショーのお話はすごく新鮮でした。朗読劇やミュージカルは知っていたけれど。そういうのも含めて、みんなで知恵をしばってもうちちょっと楽しみながら……

服部：そうよね、若い者にやってもらいたいと思いますね。新しいやり方で、何かできることがあると思うの。ファッションショーは私も夢にも思わなかったよ。

話を聞くばかりではなく楽しみながら伝えてね。それぞれの持ち味を生かしてさ。声のいい人は歌ったり、朗読のうまい人は朗読したり、カメラのうまい人はカメラで撮ったり。いろいろ、たくさんいるだろうからさ。

□：平和フェスティバルみたいのがあちこちでできるといいですね。

服部：ベネズエラは国全体でピースボートを歓迎して盛り上げてくれたの。

□：平和フェスティバルという形で、自分たち若い人たちが今から生きていくこの世の中少しでも変えられるように、例えば今日のこの場であったり、別の人からお話を聞くなどして感じ取ったものを、自分たちなりに自分の中に留めておくだけではなくて、アウトプットする。どんどんバトンをつないでいくことが大事なんだなと感じています。

感じたと同時に自分が今までどうだったんだろうと考えたときに、なんていうかな、自分は生まれが沖縄なので沖縄の抱えている歴史だったりを修学旅行を通じてやってきたんです。長崎にはうちの島は中学校の修学旅行で行って、平和学習という形でやるんですけど、行って感じるんですよ、確かに。見て、その時に感じるものはあるんですけど、さっき服部さんがおっしゃったように考え続けるということはしていないんです。ショックというものもあるんですけど、それだけじゃないような気がして。考え続けられないのは、修学旅行というこの特別な行事の中では考えるけれども、それが終わったら終わりというか。自分たちの身近な生活とそれをつなげないで、それは特別なこと、特別な行事だからやるという雰囲気があったなと思っています。自分もずっとそうだったと思うんです。

東京に来て、沖縄のことも一緒に勉強しているんですけど、そういうふうに出会って考えている先輩たちや大人の人に会って、新たに話を聞くことで、8月中は国中が盛り上がる時期だと思うんですけど、自分もその中にいたんだなと思いました。考え続けることは本当に難しいというか、直ぐに忘れてしまうのが人間だと思っていて。でも知れば知るほど、ないがしろにはできないことだと、その都度その都度思うので、みんなでバトンをつなぎながらやっていくのがいちばんだなと思いました。

ひとりで本を読むのも一つの手だとは思いますが、ただやっぱり向き合う問題が問題なのでひとりでどうしても押しつぶされてしまう。知れば知るほど怖くて、それで目をそむけてしまう人もいます。でも、そうではなくて語ることで、勉強会だったり、実際にこの場に来てお話を聞いて、自分が思っていることを伝えたりすることで、なんていうか、止まらない。バトンがその時で途切れてしまうのではなくて、どんどんつながっていくということを感じました。せっかく今、大学生なので、自分ももっと自分の大学で行動ができないかなって思いました。今、勉強会にも参加しているんですけど、勉強会は学びたい、知りたいという人たちだけが集まってやって、その場で終わりなんです。その場で自分たちが学んだことを外へ発信することが出来ていない。友だちに話すなり、フェイスブックなりツイッターなり、そういうつながりを外に外に拡散するとかしていきたい。。

服部： そうなんだよ。ピースボートも今まで乗ってきた人たちはどうしているのかなと思う。そういう話をあんまり耳にしないでしょ。だからもったいないのよ。船の中では、あの中にいるからみんなやったけれども降りてしまったらバラバラでそれっきりではもったいないでしょう。それをどのようにして継続していこうかって思うのよ。

司会： 若い人が服部さんの話を聞いて行動してくれることがやっぱり。

服部： ただ聞きっぱなしではなくてね。ある大学では学生が私の話を紙芝居にしてくれたり。

□： 大学だと先生がやる気になってくれないと継続は難しい。学生は入れ替わりがあるから、学校で継続する場合はその気になってくれる先生がいるかないかで大きく違うと思う。

□： 私の大学の平和コースは先生の移り変わりが激しくて。でも平和に関心のある先生もいらっしゃって、その方はホロコースト文学が専門なんですけれど、そういった方はヒロシマ・ナガサキのことにも非常に興味を持っていて、毎年、影絵のプロジェクトを、8月6日に広島に行って影絵を作っていて。

□： 平和の影絵展？

□：広島女学院でも先輩がはじめたプロジェクトで、毎年、テーマは変わるんですけど平和の祈りじゃないけれど、そういうことを伝える……

□：あそこはヒロシマ・アーカイブに関わって、ずっとやっていますもんね。高校時代は関わっていたんですか。

□：はい。

司会：広島だとそういった活動がたくさんあるんだね。

□：でも、意外と大学生が中心になっているのは少なくて。私が東京で団体を立ち上げたのも、最初はそういう団体があれば入りたいなと思っていろいろ検索とかかかっていたんですけど。平和問題となると国際協力、飢餓の問題とか海外に目が向いていてヒロシマ・ナガサキにスポットをあてた団体というのは本当になくて。それこそ広島大学の中にもなくて。

服部：広大に行っているFちゃんは。

□：わかります。8.6のイベントでよく会います。

服部：あの子とコンタクト取ってあげて。すごく一生懸命やっている。

□：最近ですね。私たちの同世代がはじめたぐらいで、広島でも続いている学生の団体があまりなくて。

□：ヒロシマアーカイブでは学生さんがちゃんと取材して、映像も撮って、編集までしてというのをTVで見て。アーカイブであなたみたいな学生が育ったんじゃないの。

□：アーカイブでも証言の映像を残そうみたいな活動をやっていて。でも、それを見る機会をもっと私たちが増やさないといけないなと思っています。

□：資料館はそこに行くというきっかけがないと。

司会：私も見たことがないかも。そういうことがあるのを知らなくて。

□：だから私は東京で月に1回、そういうことをみんなに伝える会を始めようと思って。被爆者を囲んで、お茶会みたいな、お菓子を食べながら話すみたいなフランクな会を、それこそ毎月6日にやりたいなあと考えていて。

□：協力します。

□：やるときはぜひ。1年に1回だと、それこそさっき出たようにその時だけになってしまふから。たまに思い出す機会があればその感覚がだんだん狭まって来るじゃない。

□：お茶会はいいと思う。

□：会話がはじまりますしね。

□：69行動というのは今の若い人たちは知らないか。6日9日に署名行動をやるのよ。

□：やっぱり署名とかだと若者からしたら政治的なにおいがしちゃうのかな。

□：それは確かに感じる時がある。

□：サヨクなんでしょうみたいな。

□：今、流行っている悪い言葉に「意識が高い」というのがあって。

□：なにそれ。

□：元々は問題意識を持っている人っていう意味だったんですけど、今は活動を頑張っていて偉そうにしているみたいな。

□：ちょっとマイナスイメージ。

□：それがあからこそ、そういう活動は余計しにくいのかなって。

服部：小生意気だなんて。

□：そうなんです。それをファッションショーまで、みんなに親しみやすいところでできれば。今はハードルが高い。

司会：今日は「被爆の証言を聞くつどい」と宣伝したんですけど、やっぱり相当に関心を持っている人ではないと集まらないなと思った。やっぱり固い会だと思っているので、夏休みなのにという方が結構多くて。高校時代の友達にも聞いてみたんですけど、ちょっと

そういうのはなじみないし、堅いなと思っちゃうからって。やっぱり苦手意識を聞く前から持ってしまったので、苦手意識を取るという意味ではファッションショーとか話す会とか……

服部：何か考えなくちゃね。導入の仕方を考えないと。

□：広島にいるときにおじいちゃん、おばあちゃんに戦争のことを聞こうみたいな夏休みの宿題とかありました。

□：なかった、そんなの。

□：そういうことがやれる先生とやらない先生といるから。私の母親は東京大空襲の被災者なんだけど、おじいちゃんおばあちゃんの戦争体験を聞く、もちろん被爆者の方のお話も聞く。そういうふうにして戦争体験を聞いてみようという方がノリがいいかなって。最近イメージしているのよね。

あと反省しているのが、さっき聞き上手になって下さいと言うお話があったけれど、母親に空襲の時の話とか聞いたらね、一気にしゃべりだしたの。こういうときにICレコーダーがあればと思った。

服部：私は聞き上手になることを勧めているんですよ。自分から話したくないですもの。昔のことなんか。

□：どういう人になら話したいと思いますか。

服部：それは聞いてくれる人じゃなくちゃ。知らん顔をしている人になんか話すもんですかとなるでしょう。みなさんもそうでしょう。

□：私は個人的には自分のひいおじいちゃんやおばあちゃんに聞くのは恥ずかしかった。だから全然聞いていない。他の被爆者の方には自分から聞けても、なんか身内には。

服部：私も自分の子どもには話していませんよ、何にも。話したくないですよ。

□：近すぎちゃうんですね。

服部：みんなそうですよ。

□：聞けなかった。

服部：子どもには話しません。聞いて来れば聞きかかれた程度は話すけれど……

□：自分からは。聞かれたらどうするんです。

服部：聞かれた程度は話しますけれど。



紙芝居で伝える

第7回

「ヒバクシャ地球一周
証言の航海」

(写真提供：ピースボート)

<返送先> 〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
電話/FAX03-5216-7757 Email: hironaga8689@gmail.com